



东芝部

KOYO  
2022

## 来場者向け特典小説 名目上文芸部！

この物語は、ごくごく普通の文芸部ライフを過ごしたかった平成生まれのナイス常識人の美少女主人公・甲楽城文陽(かぶらぎ みはる)が、甲陽学院高校文芸部員をモデルとしたキャラの濃い文芸部員たち(全員女子)に揉まれる(物理)姿と、それでも常識人として前向きに活動する姿を描いた、実際の文芸部をモデルとした勇気と成長(勇気と成長を感じられるとは言っていない)のコメディである！

### 登場人物紹介

大竹うさぎ(おおたけうさぎ):文芸部部長。いつも何かをもふもふしたがつている。いろいろと小さめ。そして、いろいろとヤバイ。ただし決して文才がない訳ではない模様。なおモデルの人の文才は(以下略)

吹崎浩奈(ふくさきひろな):一般文芸部員だが、大竹うさぎよりも権力(意味深)があり、1番強い。知識も豊富。よって、ちょっつよい。いろいろとヤバイ。

吹崎幸(ふくさきさち):文芸部員。謎の絵を書く習性がある。シューティングゲーム大好き。吹崎浩奈と名字が同じであるが、血縁関係はない。いろいろとヤバイ。

藤原彩花(ふじわらあやか):文芸部員。滑舌が酷いため、いつもカタコトで話す。昼ご飯はいつもアイス。いろいろとヤバイ。

洋見芒(なだみすすき):文芸部員。動物が好き。まともそうに見えて全然まともじゃない。いろいろとヤバイ。ちなみにリレー小説をこんな話にすることにしたのはこの人のモデルの人である。

甲楽城文陽(かぶらぎみはる):文芸部員。この部活内では、比較的常識人。強引に文芸部に引き込まれた。この小説の語り手でもある。

かめ:リクガメ。文芸部室で買われている小さな亀。よく歩き回っている。幸のモデルの人が家で飼ってる亀。

軽井沢先生

文芸部顧問。白髪、低身長、教師、小説家？書いているジャンルはスピリチュアルなもの。メガネをかけている。

女子ですが、一応この学校は共学です。甲陽生の願望です。

この小説は普段の文芸部室での出来事をモデルにしています。亀がいるのとか、彩花がカタコトだとか、甲楽城文陽の存在とか、部員及び顧問が女子になってるこ

ととか、その他諸々はフィクションですが、その他はほとんど事実です。文芸部室でいつもゲームしてるとか、人民の太陽とか、大型扇風機とかも事実です。それでいいのか文芸部。ともあれ、本編スタートです！なお、二行開けてあるところが作者の変わり目です。

~~~~~

「この先、我が部員以外立ち入るべからず」

そんな貼り紙が貼ってある文芸部室。今日もここでボクたちは元気に小説を書いている……わけではなかった。

ちゃっちゃっちゃらちゃっちゃちゃらちゃら……。部室に響くPCゲームの音、それに負けじと響く、どこから取ってきたのか分からない大型扇風機の回る音。壁に掛かっているのは、どこか狂気を感じるような、宗教的な絵「人民の太陽」。机に置いてある、「性書」と書かれている謎のファイル。

部屋にいるのは6人。机を囲んで座っている。

「大竹はなぜそんなグラビアアイドルのような格好をしているんだ？」

「知らないよっ！」

「逆ギレするな！」

大きく伸びをする小さめの部長、大竹うさぎに対して話しかけるのは、後輩であるが、部長よりも立場が上であるだろう、吹崎浩奈(ふくさきひろな)。部長はPCに向かって小説を書いている……

「ぴろん、てれてててん、てーてれてれ」

響くのは今も鳴っているBGMとは違った、また別のBGM。……前言撤回、部長もゲームをしているようだ。育成シュミレーションゲームらしい。

そして、その隣では、かたかたかたというキーボードを打つ音。やはり、こちらもゲームである。

「ん？なんで動かないんだ？んー？」

吹崎幸(ふくさきさち)がとても不思議そうに呟きながらPCをぼんぼん叩いている。名字は浩奈と同じであるが、血縁関係は全く無い。そして、「人民の太陽」の作者である。

「さち、どしたの？」

スマホで、やはりというべきか、ゲームをしている藤原彩花が目線を画面に向けたまま尋ねる。滑舌が酷いため、カタコトである。

「あぁーっ、対人戦モードにしたままCPU戦しようとしてたぁぁー！うーわ。だっる！」

そして、部室の端の方で亀に向かって餌をやりながら話しかける洋見芒(なだみすすき)。亀の名前は「かめ」である。

「そろそろ部室リフォームしたいなあ、かめもそう思うよね？」

餌を食べ終わると、かめは水槽に戻っていった。

個人個人が好きな事をしている。そして、それらは「文芸」とはかけ離れたものばかりであった。

「皆、小説書かないんですか！そろそろ書き始めましょうよ！」  
ボクは叫んだ。それはそれは大きな声で。部室中に響くように大きな声で。  
「えー、めんどくさいしー」  
「盗られたPC戻ってこないし」  
「げーむ、やりたい」  
「かめの世話も大事だよ？」  
「息抜きも大事だとおもわないかい？文陽(みはる)くん」  
様々な答えが返ってくる。  
「もうすぐ文化祭ですよ！早く書かないと部誌出せませんよ！それでいいんですか！」  
「まあまあ、落ち着きなよ。然るときになったら書き始めるから」  
部長がなだめようとしてくる。どーどー、どーどー、と。ボクは馬じゃない。  
「だれが落ち着いてられますかっ！こんなんですから、『名目上文芸部』とか言われるんですよ！」

「いやー実はね、原稿自体は出来てるのよ」  
なぜかこっちに向かってきた部長がゆるい口調で言った。良かった、部長だけあってまともに部誌を書いてー  
「前書きと後書きだけね」  
「意味がなーい！」  
前言撤回。駄目だこの人。  
その直後、体が壁に当たる。知らず知らずのうちに部長に壁際に追い詰められていたらしい。可愛らしく頬を膨らませた部長がボクの顔を上目遣いに見ながら怒っていた。  
「それと文陽ちゃん、何度も言ってるでしょ〜？あたしのことは『お姉ちゃん』もしくは『うさぎお姉ちゃん』って呼んで〜って」  
無理です。どう頑張ってもておしゃれした中二女子がいいところの見た目で何を言ってるんですかーって、  
「痛い痛い痛い痛い！何するんですか！」  
「今あたしのこと小学生だって思ったでしょ？ん？怒らないから正直に言いなさい？ね？怒らないから正直に、ね？」  
「ほっぺつねりながら怒ってにやいて言われても……いだいいだだだだだ！あーもう分かりましたよ、許して下さいお姉ちゃん！」  
「分かればいいのよ」  
すぐ離してくれた。ちょろい。  
「その代わり、お姉ちゃんにもふもふさせなさい！」  
「は？」  
「ん？」  
「え？」  
「ふふふ……」  
……誰か助けて。

それから五分後。

「んー満足満足！文陽くんが一番落ち着くねえ」

「.....ｼﾝ.....ｺｼﾝ.....」

やけに肌つやの良くなった(見た目が完全に小学生なので元から肌つやも良いんだけど)部長と、何か大切なものを失ったような気がするボクがそこにいた。

ちなみに周りは放置である。みんな冷たい。それが文芸部である。

「そもそも部長、何で文芸部に入ったんですか？」

椅子に座って猫のぬいぐるみをもふもふし始めた部長に、前から聞いたかったことを聞いてみる。

「ん？言ってなかった？」

言ってないです。

「じゃあ先に文陽くんが教えてよ〜。あたしも知りたいし、聞いてないからね」

言ってなかったらしい。

「その、ちゃんとした小説が書きたかったんです。ボクは小説書くのが好きだったんですけど、ある時『お前の小説は下手だ』って言われて、それで教えて貰いたくて」

「ふーん.....あとで小説見せなさい。あたしが見てやるわ」

「えっ、いいんですか？」

「真面目な部員の面倒はちゃんと見るってば。あたしを何だと思ってるの」

顔を赤らめ、目線を反らす部長。その姿は今まで見た部長のなかで一番可愛らしかった。

「で、結局何で入部したんですか？」

「あー、普通に小説書くのが好きだったからだよ？」

「なら書きましょうよ！」

机を叩く。部長の体が一瞬だけ縮こまった。かわいい。

「それがねえ、ちょっとした事情がありまして」

「もったいぶらないで言って下さいよ！」

それを聞いた部長はスマホを手早くいじると、

「そうだ、あたしの小説読んでみ？それで分かるから」

スマホを手渡してきた。画面には文字がびっしりと写っている。ボクはそれを読み始めて、

「にやにやにやにやんですかこれえ！」

「ありゃ、文陽くんには刺激が強かったかあ」

.....そこには、いわゆる官能小説が書かれていた。悪いことにかなりエロい作品が。

「ふっふっふ、実はあたしの一番得意な小説は官能小説なのだ！だから部誌には書けないのよ」

小さいと言うより無いと言った方がいい胸を張った部長がドヤ顔で宣言し、

「大竹、うるさい」

「ふにゃん」

あっさり吹っ飛んだ。この部活で物理的に最強の吹崎浩奈(ややこしいので浩奈と呼んでいる)が蹴りを入れたようだ。「またつまらぬ者を蹴ってしまった」とでも言いたげな表情でスマホに戻っている。一方、部長はといえ一

「っ〜！」

部室の隅の本棚に頭をぶつけ、その衝撃で落下してきた大量の本や絵、さらに私物のぬいぐるみたちに埋もれて悶絶していた。ダメだこの部活。

そんなことを思いつつ、ボクは本棚の住人たちの下敷きとなった部長の元に駆け寄る。

「大丈夫ですか！部長？」

本を払い除けて声をかけるが、部長は完全に目を回していた。

「ふにゃあ…文陽きゅんが頭なでなでしてくれたら完全復活できるのになぁ……」

「大丈夫そうですね」

少しでも部長を心配してしまったことに後悔して、離れようとしたボクの足に部長が縋り付いてくる。

「ご、ごめんって！でも、痛いのは本当だから！だから！だから！見捨てないでえ！」

「分かりました！もう十分わかったので、その手を離してください！て、手つきが！こ、こら！ひゃあああああっ！」

「ふごっ」

我ながら女の子らしい悲鳴をあげてしまったと思う。

そんなことを考え、少し恥ずかしくなっているボクの一方で、部長は地面に這いつくばってダウンしていた。

おそらく、ボクの回し蹴りを直に受けたのだらうと思う。自業自得です。お疲れ様でした。

ボクは気を取り直すために、「ンッン」と軽く咳払いをすると、目に付いた本を拾い上げた。

「広〇苑？なんでうちの部活なんかに広〇苑があるんです？」

誰もが知る名書。辞書界のトップに君臨し続ける最高の辞書、広〇苑。

それを両手で抱えながら、ボクは部長にそう尋ねた。

しかし、部長は「意味がわからない」といったような顔でこちらを見てくる。

「……いや、文芸部に広〇苑があって悪いか？」

しばらくして部長が口にしたのは紛うことなき正論だった。ただし、「普通」の文芸部に関しては、だが。

「いいですか、部長？ボクたちはまともに部誌を出さない。ゲームに明け暮れている。大量のぬいぐるみのせいで部屋がファンシーな感じになっている。このどこに文芸部要素がありますか？」

部長はまだ答えていないが、ボクが断言しよう。ない！

これには部長もさすがに口答えはできないだろう、と勝利を確信した時だった。

「お前の耳はなんのために付いているんだ？お前の目はビー玉か？私の話をよく聞いてけ」

部長は動揺している様子もなく、あまつさえボクの耳と目をディスってくる。

ボクは呆れを通り越して、部長が何を言うのか楽しみだった。

そんなボクの気持ちを弄ぶように、部長はゆっくりと小さな可愛らしい口を開く。

「普通の言葉によってエロさを醸し出す。蜜月の夜を表現する。男女の熱い熱い交わりを表現する……それが、官能小説の醍醐味では無いのか!?ただ見てすぐわかる卑猥な言葉を並べるだけではない。通常の言葉の中にエロさを見出して、読者の興奮を誘い出す。それも、ただ激しいだけの興奮ではないんだ。静かな、それでいて燃えたぎるような炎のような……うん、書きたくなってきた」

肩口まで伸びている茶色がかった髪を揺らしながら、部長が熱弁する。

とは言えども、半分くらい何を言っているのかよく分からなかったし、分かりたくもないし、とりあえず可愛らしくはなかった。

というかボクの耳はともかく、目は風評被害なのでは？

「部長の言ったことはほんと？」

唐突にそれ言ったのは今までボクと部長の会話に参加してこなかった幸だった。

そんな彼女は未だPCが直ってないらしく、ポンポンバンバンガンガン叩いている。

「ああ、当然だとも！私は表面だけの薄っぺらい官能小説を書くつもりはない！」

無い胸を張って自信ありげに言う部長だが、何も誇れてないし、あるのは部室の埃だけなので、掃除してください。

今度は、幸や浩奈と同じく悪質ゲーマーと化した彩花が「なら……」と続ける。

「なんで文陽は見て直ぐにあんなに興奮していたの？」

「はひ？」

「確かにな一。これは部長の話と矛盾してくるよな一」

「へ？」

「顔真っ赤にしてたもんね一、かめ？」

浩奈や芒さんまでもが参戦して、ボクを追い詰めてくる。心なしか、かめも頷いたように見えた。

そんな私にトドメを刺したのは終始こちらを見ることはなかった彩花の言葉だった。

「みはる、へんたい？」

「ぐはっ」

彩花からの精神的なボディーブローに、ボクは思わず頹れる。

何とか顔だけ起こした視線の先では、部長がニヤニヤしながら顔を覗き込んでいた。

「私はいいと思うぞ、文陽」

「そうよ、落ち込んではいけないわ」

「いんじゃない？」

「部長二人はキツイけど、おっけー」

「どんな、みはるも、うけいれる」

優しげな口調で、声で慰めてくる犯人たち。

例の広〇苑でも投げつけてやろうか。

ボクがそんなことを思いつつ、立ち上がった時、ちょうど彩花が思い出したように小さく呟いた。

「みはるの、しょうせつ、みるんじゃないの？」

「あっ！」

「そうだった、文陽が書いた小説を見るんだった。全く、文陽が変なことばかり言うからすっかり忘れちゃってたわ」

「変なことばっか言ってたのはあんただろーが！まあもういつもの事なので慣れましたけど…」

こんな扱いに慣れちゃった自分をどこか遠い目で見ながら、ボクは原稿を部長に差し出した。

「これがボクの手いた原稿です、よろしくお願いします」

「良いわ、少し待っててね」

「分かりました」

部長は普段ふざけてはいるが、小説を覗く目だけは超一流なのだ。

どんな評価を下されるかが楽しみでもあり怖くもある。

部長がボクの手稿を読んでいる間、ボクは他の部員たちと話していた。

「先程も言いましたが、皆さんも小説書いていただけませんか？ボクのだけだとあまりに薄すぎますし」

「えー、さっきの部長の載せればいいんじゃないの？」

「あんなコンプラ的に有罪確定の小説なんか高校の文化祭で載せられませんよ！幸さんはゲーム大好きですよ？ゲーム世界に入ったら出られなくなってゲームオーバー＝死！みたいな作品とかどうです？」

「二度と人のコンプライアンスを責めるな」

なぜか怒られた。昨日読んだ小説にインスピレーションを受けただけなんだけだなあ。

「彩花さんもゲーム好きでしたよね？なら…」

「…げーむしながら、かいていいなら、かんがえる」

「それやらないって言うてるのと同じじゃないですか！しかもやってるのノベルゲーだし！」

彼女がやっているのは現在ではプレミア付きの、屈指の鬱ゲーとして名高い作品だ。彩花さんはいつもこれ見よがしに高値が付いているゲームをやっている。もしかしたら実家が太いのかもかもしれない。

「どうしてもって、いうなら、うちの、じいやに、かかせるけど？」

太かった。

「流石にそんなのダメですよ！自分で書いた作品でないと意味がないです」

「そう。なら、わたしいがいのぶいん、がんばえー」

この人もダメだったか…

「私いつもかいてるし、別にいいよ」

続いては芒さん。カメと桃園の誓いを立てたくらいいつもカメの世話をしているので正直一番望み薄だったのだが、意外や意外、ちゃんと書いていたらしい。

「いや待てボク！そんな期待を易々と裏切るのが文芸部だって散々身に染みてきただろう！そうだ、『かいてる』が平仮名なのが怪しい！『書いてる』じゃなくて半分『欠いてる』だ！何を欠いてるんだろう、人格？」

「美しく残酷にこの部室から去ね！」



破壊力A(超スゴイ)の拳で殴り飛ばされた。この人が一番格ゲーに向いていると思う。

ちなみに、後で何を書いていたのか訊ねたところ、「カメの飼育日記」だった。だいぶ悩んだが、今回はお祈りさせていただいた。

一応浩奈さんにも訊いてみたが案の定何も書いていなかった。今は剣道部の大会に向けた練習で忙しいという、一番まともな理由だった。

「そういえば何で剣道始めたんです？」

「え...えーと、家がそれに縁があるから...かな？」

ボクがひねくれているのだろうか、何か触れてはいけないモノに触れかけている気がした。

とりあえず御家のことは訊かないでおこう。

「ほら、読み終わったわよ。あなたの声がうるさくてなかなか集中できなかったわ。反省してね？」

ボクが文芸部のための聖戦をしている間に部長がボクの手稿を読み終えてくれた。このくらいの文句は聞き慣れたので反論する気すら起きない。つくづく末期だと思う。

「ありがとうございます。そして、評価のほどは...」

「ええ、それだけだね...」

「面白いけどつまらないっ！！！」

ついにイカれやがった。

「あなたの小説は構成、言葉選び共に素晴らしかったわ。最初はありきたりな恋愛小説かと思ったけど、主人公の心情がほどほどの言葉量で巧みに表されていて、ずっと感情移入しっぱなしだった。正直、こんな無産の民だらけの文芸部に留まるのが残念なほどにね」

つまらないとか言いながらベタ褒めじゃないか。嬉しい。

「とても良い作品だった。だけど、たった一つだけ足りない点があるの。それは...」

「それは...」

「“色気”よっ！！」

まあ、うん、なんとなく予想はついてた。

「なんで主人公とヒロインは一つ屋根の下で雨宿りしてるのに何もせずただ喋るだけなの！？CはともかくAくらいするでしょうが！人間はこんなに高潔じゃないのよ！！」

「あんたの官能小説と一緒にしないでください！とりあえず文章は良かったんですね？」

「まあそれはそうね、部誌に載せるには文句ない作品だと思うわ」

「ありがとうございます！」

こうして、前書きと後書きを部長が務め、作品はボクのものだけという前代未聞の薄い本が出来上がった。

ちなみに部長は一応全年齢の小説も書いていたが、CEROがZからDになったレベルでそんなに変わらなかったのが掲載取りやめにした。健全な本にしたかったので…

そして、文化祭当日の朝がやって来る。

ボクらの活動場所は普通教室だった。一つの教室を他の同好会と分け合う形である。準備はほぼ終わっている。飾り付けもだいたい出来ているし、いつの間にか印刷も終わっていた。部長の目にくまが出来ていて、ぬいぐるみの山の上ですやすやと眠っているのを見るに、あの変態部長は変態部長で頑張っていたらしい。変態かつ変人でさえ無ければいい人なのに。

「でもこれ文芸部の展示じゃないよね……」

教室を見渡してつぶやく。文芸部の展示なのに、文芸部らしいものがほぼ無かった。

まず、部長のコレクションのぬいぐるみたちが名前付きですらりと並んでいる。その横に、彩花さんと幸さんのゲームコレクションがプレイ出来る状態で置いてあった。そもそもこんな性能のいいパソコンは無かったはずなのに、まさか家から持ってきたのだろうか。金持ちってすごい。

さらに何故かかめのいる水槽があった。餌やり体験も出来るらしい。一回五十円。何と言うか、絶妙にやる気のしない値段である。おまけに浩奈さんの「変態口りっ娘部長を吹っ飛ばすための技二十選」と書かれた展示。もう何も言えない。

でも、それよりもボクが気になっていたのは……

「何でこんな格好着させられたんですかあっ！」

部員の格好だった。

ランドセルを背負った部長、チャイナ服の浩奈さん(格闘技→カンフーとかから連想したのかも)、巫女服の芒さん、舞踏会みたいな格好をした彩花さん、男装してる幸さん。そして、

「うんうん、やっぱりあたしの目に狂いは無かったわね！」

「部長自身が狂ってますけどね……あといつの間に起きたんですか」

メイド服を着せられたボクがいた。

「いいじゃないメイド服！しかも素材もいいからかわいいしその恥じらう表情も堪らないし脱がしたくなるしあーもうさいこ……ふごっ」

「大竹、黙れ」

「はい」

暴走特急と化した部長を殴り飛ばす浩奈さん。最早見慣れた光景だ。そういえば部長にランドセルを背負わせるときも浩奈さんが気絶させて(本人は「痛くないようにした」って言うけど首回りから変な音がしてたのは何故だろう)その間に背負わせてた気がする。何度も殴られる部長も部長だけど、ちょっと可哀想な気がしてきた。

「ねー文陽」

「何でしょう？」

幸さんが話しかけてきた。「比較的背の高い幸さんには男装がいいのよ！」とか部長が力説してこうなったけど、これまた似合っている。彩花さんの付き人さん(この人はそんな人までいた。本当に何者なんだろ)のメイクも完璧だったから、まるで宝塚のスターだ。

「僕にキリマンジャロを」

「キャラ変わってる!？」

「ああそれと、あそこの愛らしい小学生さんにも何か甘いものを」

「意外と優しい！」

「ちょっと！小学生って誰のことよ！あたしは立派なこーこー二年生だって言うてるでしょーがっ！」

「え、ぶちょう、しょうがくせいじゃないの？」

「ひどくない!？」

ここぞとばかりに他の部員も部長をいじる。日頃の恨みというやつだ。

「でも見た目は完全に小学生ですし」

「うっ」

「趣味も小学生っぽいしな」

「ぐはっ」

「ちょこまか動いてる所とか見守りたくなりますね」

「うっ……ひぐっ……」

「あ、泣かせちゃった」

部長が泣き出した。その見た目も完全に小学生、それも小学四年生ぐらいにしか見えない。成長はいつで止まったのか一度聞いてみたい。

「ぶちょう、ごめんなさい」

「まさか泣き出すなんて……」

「悪意は無かったんです……」

「悪意は無かったで済まされてたまるかー！いい加減にしろー！」

いつの間に泣き止んだ……と見せかけて嘘泣きしてた部長が何故かボクの足を踏みつけてきた。何故ボクなんだ。なにもしないのに。

「何でいつもボクなんですか……いだだだ」

「……そこにいたから、かな」

「ひどい！」

そんなことをしてる間に、八時半になっていた。がらがらと扉が開かれ、

「皆さん、準備出来てますか〜？」

穏やかな声をした顧問の軽井沢先生が入ってきた。って……

「……あの、先生。その格好は……」

「え〜？似合ってないかな〜？」

「そんなこと無いですよ先生！やっぱり白髪的美少女JKにしか見えませんよ！肌もほっぺも×××××(自主規制)もふにふにでつやつやでとても三十代って思えないです！着せて良かった！」

「あんたですか犯人は！何でわざわざうちの制服着せてるんですか！」

目の前には、ボクたちの制服を身に着けた先生がいた。いつもは頭のおかしい部員と関わるのを避けるために部室にやって来ないのに、こういうときにだけやって来て、さらには部員の悪ノリに乗ってしまうのだから、普段はまともに見えていても、中身は文芸部員とさほど変わらないことが実感できてしまう。ちなみに、軽井沢先生もうちの学校に通った経験があり、いにしえの文芸部員だったようだ。

「似合っているのだからいいじゃないか！結果オーライだよ！しかも……ほら」

横目で先生を見る部長。その視線の先には、ぶつぶつと何かをつぶやく姿が。なんか、「ふへへへ……これで、ようやく……」とか、「若い子と……できる……」などと言っている。ところどころ聞こえないところがあるが、不穏なことであるということだけは理解できた。

部長は続けた。

「こんなにも喜んでいらっしゃるじゃないか！」

「これのどこが喜んでるんですか！頭のネジ、さらに数本とってますよね！前よりひどくなってますよね！先生、しっかりしてくださいよ！仮にも先生でしょう！」

ボクは先生の肩を軽くゆすった。

「……はっ、ごめんなさいねー。なぜかとてもいい気持ちになるんですよ」

「葉でもやってるんですか！」

「この服を着るとね……ふへへへ」

「あ、手遅れなんですネ」

あきれボクをよそに、部屋の上に取付けられたスピーカーからアナウンスが流れる。

『文化祭開始まであと10分です。生徒の皆さんは所定の位置について、始まるのをお待ち下さい。特に名目上の文芸部！決して問題を起こさないように！』

……指名で注意されてしまった。「名目上」は生徒の間で広まっている非公式の悪名である。その名を公式の場で呼ぶということは、それ程までに生徒会に目をつけられてしまっているということだろう。

「上等じゃないか！さあ、かかってこい！生徒会共！」

「竹刀の用意はもう済んでいる」

「僕もいつでもハッキングできるよ」

「じいや、おねがい、してもいい？」

「行くよ、かめ」

声を張り上げる部長に続き、竹刀を構える浩奈さん、パソコンに向かって何かを始める幸さん、スマホを取り出し電話をかける彩花さん、そして甲羅の中に身体を引っ込めたかめを持つ芒さん。

「ちょっと待ってくださいよ、皆さん！戦争でも始める気ですか！」

「そりゃそうだろう。我が部を馬鹿にされて黙ってられる程、あたしたちは馬鹿じゃないよ。さあ、文陽くん、武器を持って立ち上がるんだ！」

「先生、止めてくださいよ！このままじゃやばいです！」

「いいですよもっとやってください！あいつらに一泡吹かせてやるんですよ！」

先生に注意してもらおうと声をかけるが、先生もなぜか乗り気なようだ。生徒会を「あいつら」呼ばわりするぐらい何か不満でもあったのだろうか。

ぴーんぽーんぽーんぽーん、と再びチャイムが鳴り響く。

『さあ、文化祭の始まりです！』

「さあ、祭り《戦争》のはじまりだあー！」

部長たちが、がらがらっとドアを開けて飛び出していった。それをボクは横目で見ながら、もう知ーらーない、と思うのであった。

結局、部長たちは、ドアの前で待ち構えていた生徒会の人たちに確保されてしまったため、文化祭に影響を与えることはなかった。全員捕縛されるまでに1分もかからなかった。生徒会ってすごいんだなあ。

こうして、ボクたちの文化祭が始まり、そしてすぐに終わったのだった。

## あとがきと言う名の本編登場人物のモデル(一部)のコメント集

この企画は原案・現文芸部部長、企画・次期文芸部部長予定(今のところ)、執筆・文芸部有志でお送りしたわけですが、最初にも言った通り、この作品は甲陽学院高校文芸部での実際の日常をモデルにしております。

と言うわけで！

あとがきに名を借りて、登場人物のモデルにもなった、この作品のおおまかな設定を作り上げた二人(アニメのキャラクターになぞらえて、「中の人」と書かせて頂きます)にコメントをもらうことに致しました！

### 1・大竹うさぎの中の人(原案担当)

「何度も言っていますが、僕は来場者特典用のリレー小説という所までしか計画してなかったんですよ！それがいつの間にかこんな企画になってるんですからこれは僕のせいじゃないです。全員変人、それがこの文芸部です。だから僕がいるから変人が寄ってくるってことじゃないんです！お願いだから信じてください！あと流石にここまでのことはやらかしませんのでご安心を！」

### 2・洋見芒の中の人(細かな設定担当)

「この小説の大まかな設定を作ったのは僕です。文芸部室で起こっていることをそのまま書きました(少なくとも僕のやつは)。ふだん文芸部室にいるのは、僕を含めて頭のおかしいやつばかりです。いるやつは、ということなので、ほかの部員たちは多分まともです。これからも文芸部を何卒よろしくお願いします」